

# 霊宝館だより



鎌八幡宮（伊都郡かつらぎ町兄井）関連記事は8頁

霊宝館だより 第86号

平成20年3月4日発行

和歌山県伊都郡高野町高野山306

(財)高野山文化財保存会

高野山霊宝館

電話0736-56-2029

URL <http://www.reihokan.or.jp>

## 霊宝館予定

春期企画展

「童子とほとけ」

4月26日(土) ～ 7月6日(日)

第29回大宝蔵展

「高野山の名宝」

7月19日(土) ～ 9月15日(月)

秋期企画展

「高野山に伝わる書」

9月27日(土) ～ 12月7日(日)

秋期イベント

高野山霊宝館もみじ祭り

「高野山の秋」フォトコンテスト

現在平常展開催中

4月20日(日)まで

## 高野山の名鐘

## 其の8 歴史の狭間に生きた梵鐘

霊宝館副館長 井筒 信隆



普賢院正面楼門

高野山にあつて最も賑やかな雰囲気  
が漂う千手院の一角に普賢院が存  
在する。その正面楼門に懸かつてい  
る梵鐘は、その銘文から文禄四年  
(一五九五)に鑄造されたもので、  
元興山寺に伝わっていたものである  
ことが判明する。

興山寺は桃山時代に現在の総本山  
金剛峯寺の別殿の辺りにあつた寺院  
で天正十八年(一五九〇)に豊臣秀  
吉が建立寄進した寺院である。『紀  
伊統風土記』には「興山寺は興山上  
人木食心其の開基、天正十八年建立、  
論議法談の会場として奉請して勅願  
寺とする」とみえる。」と記述してい  
る。高野山に存在した学侶・行人・  
聖の三派の僧侶集団中の行人方本寺  
として機能していた寺院である。

明治初年に三派は廃され学侶方に  
統一されたことから同院は廢院とな  
り、建物は現在の高野山大学の発祥  
ともなった大学林の建物として利用  
された。その後方に徳川家康及び秀  
忠の霊をまつる行人方の薬師堂すな  
わち東照宮の建物が存在していた  
が、明治二十一年(一八八八)の山  
上での大火災で多くの寺院の焼失を  
受け、その再建にあつて廢院とな  
つた興山寺関係の建物が移築され活  
用された。この梵鐘を伝える普賢院  
には、興山寺東照宮境内に存在した



重文 普賢院四脚門

江戸時代初期建立の門が移築され、  
重文「普賢院四脚門」として伝わっ  
ている。

坪井氏は昭和六年八月四日に普賢  
院において梵鐘を調査されている。  
そして梵鐘に陰刻されている銘文か  
ら、興山寺から同院に明治四十二年  
(一九〇九)に移されたことを報告  
されている。また、坪井氏は水原堯  
榮師著『高野山金石図説』(大正十  
三年発行)の説明を引用し「もとこ  
れ興山寺権現の壇上にあつて興山寺  
学徒のために時を報じたもので、世  
の隆替推移によぎなく今は普賢院楼  
門上に鳴を沈めて掛かつている。」  
との記述を紹介されている。

この梵鐘には、池の間四区に陰刻  
銘が存在していて、慶安四年(一六

### 収蔵品の紹介 60

# 星供曼茶羅図

絹本著色

縦92.0cm 横57.1cm

江戸時代 金剛峯寺

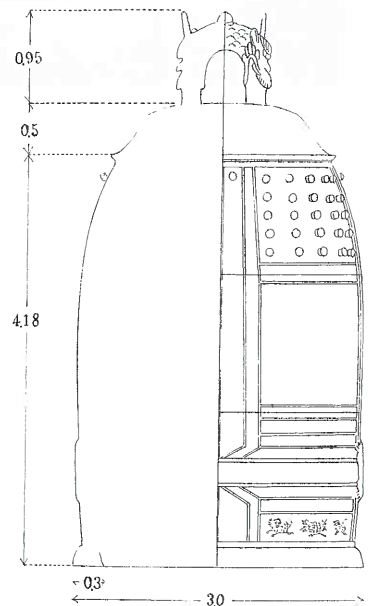


五二)の改鑄の銘が第一区に。延宝二年(一六七四)の改鑄銘は第二区に、天明三年(一七八三)の三度目の改鑄の事について第三区に、明治四十二年五月に興山寺から普賢院に移された際の住職名や、移されるにあたって組織された結縁講が講元等の人々の名前や戒名等が第四区に多

数存在すると報告されている。また、第一次と第二次の改鑄にあたっては、高野山麓の現橋本市柏原の鑄物師が携わっているが、第三次の改鑄では和歌山の鑄工により行われている旨を在銘文により説明されている。この梵鐘は近世の高野山の歴史の跡を記録する梵鐘である。

密教はインドで生まれ、中国を経由して弘法大師空海により本格的に日本に伝えられました。その伝播の過程で星や天体に対する信仰が取り入れられ、密教において重要な位置を占めています。両界曼茶羅のうち胎藏曼茶羅の最外院には多くの星神がみられますが、その影響が最も強くあらわれているのが星供曼茶羅(星曼茶羅、北斗曼茶羅ともいいます)

星供曼茶羅にはいくつ種類がありますが、本図は四角い形から方曼茶羅と呼ばれるものです。三重院からなり、青色の中院上部に釈迦金輪、中央と四方・四隅に九曜、下部には北斗七星(と輔星)を配します。第二院には十二宮、一番外側の第三院には二十八宿が描かれます。



た。この修法は星供あるいは星祭と呼ばれ、高野山では毎年二月三日の節分に行われます。星供曼茶羅はこの星供の本尊として祀られます。

十二宮：一年で一周する太陽の通り道(黄道)を十二の区画に分けたもの。日頃なじみ深い星座占いで知られますが、西洋の十二宮とは双児宮(ふたご座) ↓男女宮、磨羯宮(やぎ座) ↓摩羯宮(怪魚) など若干の違いがみられます。

九曜：日、月に太陽系の惑星(火星・水星・木星・金星・土星)と日食・月食を神格化した羅喉、彗星を神格化した計都を加えた九尊。

宮、九曜、二十八宿は星々を神格化したもので、人や国々の運命を司るとされ、その組み合わせによって吉凶をみる星占いが発展し、天変地異の際や個人の除災・延命を星神に祈る修法が行われるようになりまし

二十八宿：一カ月で一周する月の通り道(白道)を二十八の区画に分けたもの、もしくはそれぞれの区画の目印とする星座を指します。(F)

図68-1 鐘の尺

## グランプリ賞



和歌山県かつらぎ町 木下 滋

## 20点が入選

## 「高野山の秋」フォトコンテストを開催

昨春秋、第二回もみじ祭「高野山の秋」フォトコンテストが行われました。たくさんのお応募があり慎重に審査が行われ、二十点の入選作品が選ばれました。選ばれた作品は十二月十五日、十六日に、迎賓館で展示され、今春も迎賓館にて展示予定です。

平成二十年も「高野山の秋」フォトコンテストを開催しますので、たくさんのお応募お待ちしております。

「高野山の秋」  
フォトコンテスト総評

十一月末、高野山霊宝館事務所は高野山の短い秋の一瞬をとらえた力作で充満しました。審査には職業として写真撮影に携わる方ははじめ、幅広い年齢層の方々にご参画いただき、厳正かつ慎重に行われました。

グランプリ賞に輝いた木下さんの作品は、構図全体からあふれる荘厳で冷たい空気が感じられるだ

金 賞



奈良県葛城市 奥村 行仙



東京都足立区 叶 勝則



和歌山県橋本市 北山 文宏

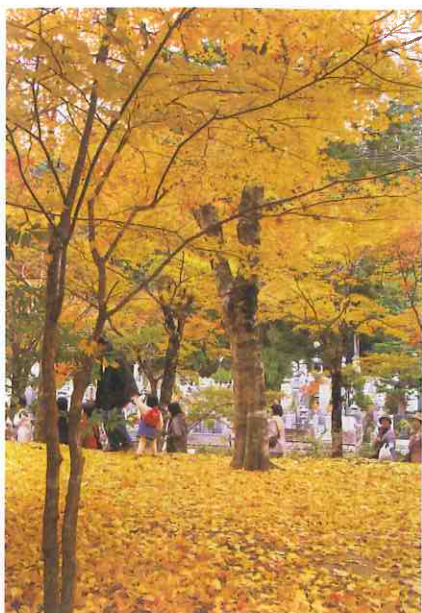
けでなく、今年の秋の一瞬でありながら千年前と変わらないという歴史を表現した点が高く評価されました。

金賞に選ばれた叶さんの作品は斬新な構図から宿坊の静けさと居心地の良い雰囲気を感じられます。北山さんの作品は参拝者が小春日を楽しむほのぼのとした心情が伝わってきます。奥村さんの作品は大自然と共に参拝者をやさしく包み込む観音さまのやわらかな視線が感じられるような気がします。

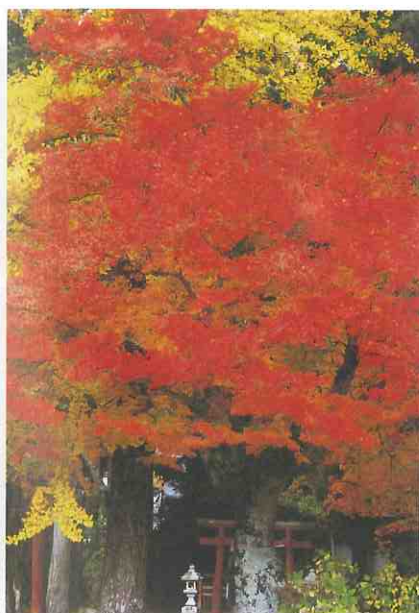
銀賞、入賞に選ばれた皆様方も高度な写真技術はもとより、個性的な構図や配色がすばらしく、何気ない日常でありながら心に残る一瞬をとらえた感性が高く評価されました。鮮やかな紅葉を中心とした力作の中で、爽やかな風や動き、音や声などが絶妙に表現された作品が多く審査員の共感を得たようです。

惜しくも選外となった多くの作品も力作揃いであり、次回は霊宝館内で応募作品をすべて展示し、不特定多数の拝観者すべてが審査員となって投票いただく審査形式を検討中です。多くの皆様方のご応募をお待ち申し上げます。

銀賞



和歌山県田辺市 竹本 有里



和歌山県かつらぎ町 山中 健次



和歌山県岩出市 塩尻 博

入賞



大阪府富田林市 田嶋 伸雄



岡山県矢掛町 橋本 明禅



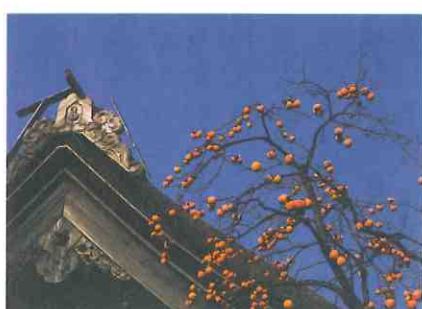
和歌山県高野町 金津 大二郎



和歌山県和歌山市 渡瀬 圭造



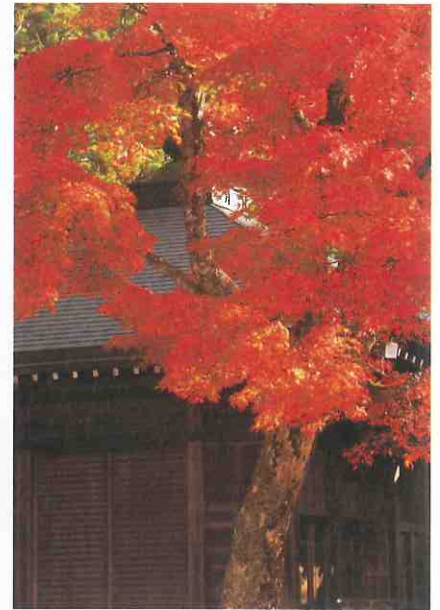
大阪府高槻市 實村 昭三



和歌山県高野町 福形 安希子



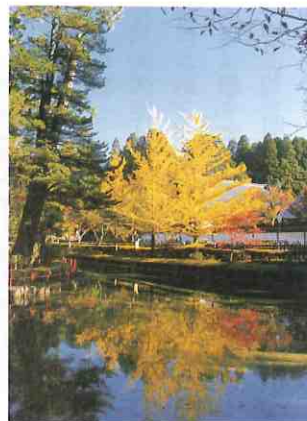
和歌山県橋本市 田伏 猛



大阪府河内長野市 半井 好喜



神奈川県相模原市  
利根川 邦雄



大阪府河内長野市  
富澤 京子



和歌山県高野口町 丹下 三郎



和歌山県橋本市 井上 洋一



和歌山県高野町 増谷 妙子

高野山の文化

(一) 巡寺八幡について その四

前奥之院維那 日野西 眞定

(二) 巡寺八幡の兄井村鎌八幡社 への返還について



酒殿神社本殿脇の鎌八幡社

(一) 御神体熊手の納められた箱の記述

往昔従り、春秋半年宛交代シテ、御鎮座シ守護シ奉リ候處、今明治己巳年十月、天朝従り御出為被ル。依而、此ノ外宮ニ納メ、寺領兄井村八幡宮ノ社壇ニ移シ奉リ畢ニス。

附リ、明治二己七月廿日ヨリ、小田原報恩院ニ御鎮座在ラ為被レ候事。

箱板寄附五大院長麟 宮細工手間寄附報恩院應純 錠前蝶 番寄附 植田吉毗

平成十年、台風ニ依り破損、同十一年己卯十一月二十八日、「箱ヲ新調ス。」コノ文句が落ちていたので日野西が挿入ノ右発起人、奥ノ院維那日野西眞定寄附者、高野山寺族婦人会 会長恵光院近藤妙子 福智院静好子

蓮華定院添田清美 清浄心院山岸芳子  
報恩院山口澄子 桜池院奮野弘子  
正智院長澤汎子 上池院田島恵美子  
宝城院山東信子 金剛三昧院久利文子  
大阪市森瀬和子 池田市中一恵  
鳥取県 鳥取市井後尚久  
宮仕村上嘉章代  
眞定徒弟中一恵筆

以上が、熊手の納めてある箱に記述されている記録であるが、明治二年(一八六九)に記されたものが前五行である。その後は、平成十一年十一月二十八日に書き加えた分である。これは、平成十年(一九九八)、台風のため、鎌八幡社後方の大木が倒れ、社殿を大破した。この時、大切な御神体を納めていた箱も破損した。しかし、有難いことに、御神体(熊手)は無事で





兄井にあった時代の鎌八幡宮の神木

あった。

その時、私はこれは高野山の人達によつて新調すべきだと考え、高野山寺族婦人会会長近藤妙子女史に、会員で寄進するように頼んだ。それも、一人ではなく、出来るだけ多くの人に協力してほしいと頼み、十人ですて戴くことになった。この功德を一人で占めるのはいけないと思つたからである。

その箱書さは、私と法の上では弟子になる、もと高野山大学で書道を教えておられた中一恵先生に頼んだ。また信者である森瀬和子と、学問上の弟子である井後尚久君も共に進んでいたので、別に社殿再建の費用を寄進してもらつた。

神主さんや氏子の責任者達は、大破

した社殿の再建に頭を痛め、とても御神体の納められている箱の修覆に、力を致す余裕のないのをみた私は、宮司さんに、これを新調するといくらかかるかを、大工さんに尋ねてもらつたら、僅か十五万円だという。そこで、高野山寺族婦人会に、これを頼もうと考えたのである。

時の会長さんは、恵光院近藤妙子女史であり、当時、私は寺族婦人会に頼まれて、高野山信仰について話をしたり、実地見学の会もし、その時にこの御神体も見学させて戴いたことがあつた。『密教文化』（第一二〇号）は、昭和五十二年（一九七六）に発行されているが、これに、私は「高野山神仏分離資料とその解説（一）」にこの御神

体を政府の命令で、金剛峯寺が兄井の鎌八幡社にこの御神体を返ささせられたことを記してある。

これを見ると、その頃のことだつたと思われるが、私は酒殿神社に訪れ、その訳を伝え、宮司村上喜章氏に、この御神体の入った箱を調べさせて戴き、箱の中に墨書された明治二年の記録を写真に撮らせもらつてゐる。またこれを『毎日新聞』（和歌山版）に記事にもした。

それ以来、村上宮司は、私の連れて行く人々には、大切な御神体であるが、見せてくださるようになった。その関係から、寺族婦人会の人々も、拝見することが出来たのである。また、このことがあつたために、会長さんもすぐに相談にのつてくれたのである。

## （2）兄井村鎌八幡社への返還

私は、このことについて、論文と資料紹介を行っている。論文は、（一）「高野山の神仏分離」（大谷大学国史学会編『日本人の生活と信仰と』同朋舎刊）で、資料紹介は、（二）「高野山神仏分離資料とその解説」（『密教文化』第一二〇号）と、（三）「行人方旗本坊と頭ノ寺について」（『堯栄文庫研究紀要』第二号）である。

まず、「高野山の神仏分離」の内容

を要約すると、次のようになる。

巡寺八幡は、行人方の信仰のシンボルとなるが、本来は五ノ室・小田原谷の行人方から信仰されていたのである。それが、室町時代初期に、「巡寺」されるようになると、行人方全体の信仰の対象に発展した。

それが、箱書の記録にあるように、明治二年（一八六九）十一月に堺県知事は、政府の神仏分離の令により、その発生の地、かつらぎ町の「兄井村」に返すことを、命じて来たので、金剛峯寺はその信仰の中核である「熊手と旗竿」を返さなければならぬことになった。しかし、その社殿が新調されるために、一時天野社に預けるように命じている。

こうして、兄井村の鎌八幡社に祀られるようになったが、明治四十年（一九〇七）には、政府は、小社の合併を命じて来たので、同社も三谷の丹生酒殿神社に合祀され、現在に及んでいる。

しかし、高野山側には、巡寺八幡講所属の、五大力菩薩像（国宝）・二十五菩薩来迎図（国宝）などの、宝物が残っている。如何に、この講が力を持つていたかが分かる。つまりここに行人方の実力が示されていると思われる。

さらに、熊手と一組であつた宝剣（台付）・弓（三筋）・矢等は、霊宝



鎌八幡社の御神木  
旧社同様に鎌が打ち込んである

館に保管されている。詳しい説明は後に記す。ただ、弓に、「八幡大菩薩 天正五年（一五七七）八月十一日」と銘が刻されていることは、必要上記しておく。要するに、これらは、修験道の柴灯護摩の法具であり、行人方には、この性格があることを示している。

この鎌八幡は、御神木櫟の木に、鎌を多数打ち込まれているのが特色である。『紀伊続風土記』（五・総・二九二頁）にも、この神木に鎌を打ち込み、「其ノ鎌、樹に入ること、次第に深ければ成就し、落れば叶わずといふ」とある。そこで「鎌をうつこと、蓑の如く、鎌の深く入るものは、樹中を貫きて、芒ノ刃が外に出る事、一寸余り、然るに其樹蒼々として繁茂す、実に奇といふべし」と記述されている。櫟の木は、木質が和らかいので、こうした

ことも起こったのである。この鎌を打ち込むことが非常に盛んとなり、社前には鎌を売る店まで出来、信者の好みにより、大小の鎌が買われ、多い人は、一時に千挺も打つ者があつたとある。

ところで、現在の鎌八幡社には、社殿内に、「諏訪大明神社 寄附當村 講中」と表記しており、その裏には、「維時明治三庚申歳夏四月 神主望月 幸右衛門 大工棟梁山崎邑久治郎」と記した神札が祀つてある。鎌八幡社とは、非常に関係の深い存在であると考えられる。なお、同社には、もう一枚棟札がある。これによると、明治二十五年に鎌八幡社は再建されていることが分かる。但し明治四十年（一九〇七年、鎌八幡神社が酒殿丹生明神社に合併された時、諏訪大明神は廃社となつ



諏訪大明神明治3年再建の棟札（表）



（裏面）

たが、この木札によって、同社内に秘かに祀られることになったと考えられる。

私が、この「諏訪神社」にこだわるのは、理由があるのである。諏訪神社には、「御柱祭」があるからである。この行事については、清川理一郎著、『諏訪神社 謎の古代史』（彩流社刊）と小倉学氏の「能登半島における諏訪信仰―鎌打ち神事を中心として」（『加能民俗研究』（二十二）とがある。しかし、前記の書が全般に渡っているの

で、同書により記述する。全国の「諏訪神社」の中心的存在の「諏訪大社」は、長野県諏訪郡中洲村（上社）、同郡下諏訪町（下社）に存在する。同社では、寅年と申年の七年目毎に、「御柱祭」が行われる。その前の年に、御柱にする木に同社の神の使いの「鷲」の形をした「薙鎌」を打ち込み、神木とする。これを十六本に行い、柱を作る。四本を一組とし、上下二社に、二組ずつ建てる。これを「柱建て」という。

この行事は、諏訪神社系の特色となっている。

能登半島の付け根の町羽昨近くの「鎌の宮・諏訪神社」（石川県鹿島郡鹿西町金丸）には、社殿がないが神木タブの木には、八月二十七日におびただしい鎌が打ち込まれ、「鎌祭り」が行われる。同じ神事が、近くの鹿島町藤井の諏訪神社と七尾市室町の諏訪神社でも行われている。

長野県北安曇地方では、小谷村中土の「大宮諏訪神社」に、諏訪大社の下社の宮司が薙鎌を奉持して行き、薙鎌打ちの神事を行っている。北安曇地方



熊手、さや・本体・箱が並べられている

でも、糸魚川と松本を結ぶ千国街道に、白馬村の桐久保諏訪神社、北城村の嶺方諏訪神社、黒川諏訪神社、池原諏訪神社、千国諏訪神社等がありここでも行われている。

その他、群馬県利根郡白沢村の諏訪神社、最後に『紀伊統風土記』により、兄井諏訪神社に、薙鎌の伝統があると記している。

こうして、鎌八幡の「鎌を打ち込む風習」は、実は諏訪神社に、はじめは発生した習俗であると考えられるのである。

そこで、前記『紀伊統風土記』(同頁)の、「兄井村」の項を検討すると、次のようにある。諏訪明神社、鎌八幡宮が並んで記せられ、「鎌八幡は社なし」とある。「古、村中に諏訪次郎左衛門といふ者あり、村の鎮守諏訪明神

の境内に、假殿を造りて八幡宮を祭り、神靈此ノ樹に託る、今樹の側の小祠は諏訪明神なるを、鎌八幡の名盛んにして、本社之神名を知るものなく」という状態になった。神木の側にあるのは、本来は鎮守社の諏訪明神であったのである。それが、鎌八幡の方が、金剛峯寺と結んで有名になり、諏訪神社の方は、存在観を失って来ている。

さらに、「諏訪氏、代々神職たりしに、元和六年の火災に、旧記悉く灰燼となり、(中略)其の末葉、今、望月嘉八郎と号し、地土にて神職を兼ね、高野山より鎌八幡神酒料として、大豆六斗寄附あり」とある。

こうして、諏訪鎮守社は、江戸時代には存在し、神職諏訪氏もいたが、次第に鎌八幡の方が有名になり、元和六年(一六二〇)に火災に会ってから、

望月嘉八郎と名のり、地土となり、神職を兼ねる身となり、高野山からは鎌八幡を守る役料を受け、次第にその方の役が主体となっている。

明治二年(一八六九)に、堺県知事の命により、鎌八幡社は新築され、熊手及び旗竿は同社に祀られるようになった。この時、諏訪大明神社も、兄井村の講中の寄附により、明治三年四月には、神主望月幸右衛門の手により建立され、二社となっている。しかし、明治四十年(一九〇七)に、酒殿丹生神社に合併された時は、建立されたのは、鎌八幡社だけで、その中に、前記諏訪神社の明治三年の神札が祀られるだけとなったと考えられる。

なお、この二社は、同じ兄井村に存在したところから、『紀伊統風土記』(五・総・二九二頁)には、天保六年(一八三五)仁井田好古(『紀伊統風土記』編集者)の記した「鎌八幡祈樹碑」には、御神木に、長塔(熊手)と旗がかかっていたとするが、別に村の辰の方角にある浦島には、「幡掛松」があると記す。また、『紀伊統風土記』(五・総・八十三頁)の「巡寺八幡宮」の項には、「御旗の懸りし松とて、管内兄井村の田中にあり、此木田三谷莊涼の森にありしが、昔洪水の時、流れて此所に止まるといふ」と記している。



鉄製の熊手の部分。長さ10センチほど

前にも記したが、行人方には巡寺には、二つの信仰のシンボルがあり、奥の院のグループは、江戸時代には巡寺大黒を信じるようになり、その他のグループではこの巡寺八幡を奉じるようになったが、この点の考察は後に行う。

ここで、鎌八幡社に納められている「熊手」を紹介しておく。「熊手」は、長さ四・一メートルで、八角面のさやの中に納められている。その中に、本部が四・八メートルで、その先に鉄製の三本の鉤、長さ十センチがつけてある。これが、さらに今回新調された長い箱に納められているのである。なお、一生に同社に高野山から返された「旗竿」は行方不明である。(つづく)



高野山子供会（後の日曜学校）記念写真。大正7年（1918）3月17日撮影。

高野山日曜学校は、児童を宗教的に教養し、社会人としてあるべき方向へと導くことが、社会全体を救済することになるという基本理念のもとに開校されました。写真の持ち主は植木ヌイ子さんで、ヌイ子さんは大正7年10月16日の子供会の催しでは、幻灯（映写機）の説明役の一人として参加されています。（写真は植木みゆきさん提供）

## 一枚の写真から

# 高野山日曜学校と幼稚園

現在の高野山には、公立の保育所、小学校、中学校と、私立の幼稚園、高校、大学、そして僧侶を養成する教育機関などが充実しています。

高校、大学は、初め古義中学校・大造林と称して、明治十九年（一八八六）の開校となり、その昔、「学山高野」と呼ばれた伝統を今に伝えています。

一方、高野山の学校施設の内、創立が遅れたのは、小学校、幼稚園、保育所などでした。学制が文部省（現、文部科学省）によって定められたのが明治五年（一八七二）です。その後わずか三、四年の間に、全国に二万六千ほどの小学校が設置されたといわれているなか、高野山の尋常高等小学校は明治三十九年（一九〇六）十二月の開校（昭和三年町勢要覧）となっています。

高野山内から距離的にもっとも近い摩尼地区の高根尋常小学校が、明治九年（一八七六）十月に創立していることからすると、高野山小学校の創立がいかにも遅れていたかがわかります。

ちなみに、開校時の校舎は現在の金

剛峯寺前駐車場付近にあり、当時の生徒数は八名だったといえます。

高野山小学校の次に創立したのが、私立高野山幼稚園でした。幼稚園は、昭和八年（一九三三）に保育園として開園したのが始まりだとされています。こうした低学年層の教育施設の整備が遅れた理由については、高野山の場合、少し事情が異なりました。

政府による女人禁制の解除通達が、全国の社寺に対して発布されたのは明治五年です。ところが高野山は、千年以上続いた修行の道場であることから、女性と七歳以下の子供については山内居住を可とせず、最終的に女人居住の禁制が解かれたのは、明治三十九年でした。このことから禁制が解かれる以前は、小学校の必要性が認められず、当時山内で暮らしていた男子児童達は、近隣の小学校まで通わねばならないという現象がおこりました。

さて、前置きが長くなりましたが、今回ご紹介する一枚の写真（上段）は、



高野山日曜学校校長  
光明院主  
加藤清章師  
(1883~1955)  
千葉県生まれ  
奥之院維那や金剛峯  
寺執行を歴任。

大正七年（一九一八）三月十七日に撮影された高野山子供会での記念写真で、後ろに写っている建物は、焼失前（昭和元年焼失）の金堂かと思われる。実はこの子供会というものが、後に日曜学校となり、最終的には高野山幼稚園へと発展したという歴史がありました。

高野山幼稚園の前身ともなる子供会は、大正四年（一九一五）に発足したとされ、これを始めたのが、山口憲雄（けんのり）という当時の現役高野山大学生でした。学生ながら、数名の仲間と共に児童への宗教教育の必要性を標榜し、そして実践したことは、おそらく周囲を動かす起爆剤となったようです。

こうして大正六年（一九一七）十月七日、光明院を本部として、高野山子供会が正式に開会します。ただ正式といっても一寺院による個人経営で、光明院加藤清章師を会長、山口憲雄師が主任となり、さらにこれに賛同する有志や父兄の援助を受けながら、学生たちが中心となって活動していました。

大正九年（一九二〇）頃になると子供会の名称は日曜学校となり、生徒数は三百名を越えるほどにまでなっていました。こうした日曜学校への参加数の増加にともなう、大正十一年（一九二二）に、その教室を光明院から大師教会本部へと移します。そして大正十一年十一月には、第六回日曜学校開校記念大会が盛大に開催され、口演童話作家で有名な久留島武彦氏が招待されるなど、日曜学校の活動は活発化していきます。

当時の日曜学校は、六歳以上、十五歳未満までを一括対象にしていました。大正十四年（一九二五）一月からは幼稚科を別に設けることになり、より細分化されて運営していくこととなります。こうした状況によるものかどうかは分かりませんが、翌年の大正十五年の春からは、日曜学校は大師教会の管轄から一旦離れ、その経営が高野山の青年僧（大学生）の集まりである曼荼羅会へと移管されています。

大正時代から昭和にかけては、全国的な規模で社会事業の取り組みと、児童への教育が盛んに叫ばれました。大寺院などでは病院や療養所の設立に加え、児童教化にともなう託児所、日曜学校などが大々的に展開されました。このような社会事業への関心の高まりによって、昭和五年（一九三〇）十一月

月九日、高野山日曜学校は、個人経営から金剛峯寺宗務所内社会事業協会に移管することとなり、昭和六年四月から本格的に開校されたようです。

昭和六・七年の夏には三週間に限って高野山夏季保育園が開催され、これがきっかけとなって、昭和八年（一九三三）四月九日（六月二十一日とも）から、日曜学校とは別に高野山保育園が開園されました。

この同じ年には東京高野山別院にも高野山幼稚園が創立しており、そうした影響もあってか、昭和十年（一九三五）には、高野山保育園から幼稚園として認可を受けたとされています。

一方の日曜学校も、「母の会」という父兄の援助を受けて継続されていましたが、昭和七年（一九三二）には高野山大学に児童研究会が創設したことや、幼稚園が開園されるなど、児童を中心として教化活動する組織が並び立



光明院での日曜学校（子供会）記念写真  
光明院で日曜学校が開催されたのは大正11年（1922）まででした。撮影場所は光明院前庭です。写真に写るこの当時の児童には、今とは違って笑顔が見られないことに気づかれます。単に時代性なのか、それとも宗教教育が行きとどいていたと見るべきなのでしょう。か。（写真は植木みゆきさん提供）

ちました。中でも児童研究会の童話活動にはめざましいものがありました。が、その反面、日曜学校自体の活躍の場が狭められていくことにもなっていました。

日曜学校はこの打開策として、昭和九年頃に「いろは会」という研究会を設けるなどして、積極的に童話や演劇、歌などにも取り組みました。ところがそれも長くは続かなかつたようで、昭和十三年（一九三八）五月五日には、児童研究会と当時、宗務所社会課の経営であった日曜学校とを合併させることとなり、新たに、少年（児童）教化



昭和初期頃の日曜学校  
撮影場所は現在の大学正門内の駐車場付近です。ここに写っている方で、今もご健在な方もおられるようです。ちなみにこの付近にあった桜の木は、日本に5、6本しかないという珍しいものだったとか。(写真は高橋保子さん提供)

研究会として発会するなどの強化策をとりつつ、さらなる発展を目指していくこととなります。

しかし、こうした日曜学校へのテコ入れも根本的な対策とはならず、ましてや、日曜学校の教師の大半が大学生という実務期間の限られたものであったことや、その後の大戦における人材の損失は、日曜学校にとっても少なからず影響を与えたものと思われま

が、昭和二十三年頃を境として、急速に影を潜めていくこととなります。

最後に、高野山子供会、後の日曜学校が開校されていた場所についてふれておきたいと思えます。

すでに述べたように、日曜学校は大正十一年の夏には、光明院から大師教会へと移され、さらに大正十五年春には大師教会から清松苑へと移転します。この清松苑と呼ばれた教室がどこ

にあったものか定かではありませんが、現在の小学校と大学の境に建っていた住宅(青松苑)だった可能性があります。

昭和に入ると大学の新校舎が現在の場所(上ノ段・紅葉ヶ丘とも)に建てられ、続いて金剛峯寺境内地(興山寺跡)に建っていた大学の旧校舎(講堂)が、新校舎の建つ敷地へと移転されはじめます。こうした旧校舎移転事業に伴って、昭和



高野山日曜学校主任  
山口憲雄師  
(1904~1981)

高野山で子供会を創始した山口憲雄師は、世間に日曜学校というものがあることを知らずに、自らの考えにもとづいて始めたのだそうです。

憲雄師は徳島県出身で大正十一年に大学を卒業しており、高野山日曜学校でのさらなる活躍が期待されたのですが、卒業後しばらくして山を下りているようです。そして、いつの頃か神戸市へと移って、辻説法をしながら若宮高野山を開き、そこでも生涯、児童教育に携わっておられたようです。

七年(一九三二)十月、日曜学校がこれらの建物の一つを貰い受けることになった記録があります。

現在の大学正門を入ってすぐの所に駐車場がありますが、当時、この場所には金蔵院という寺院が建っていて、日曜学校と幼稚園の教室となっていました。ただ、金蔵院の建物がそのまま幼稚園の教室となっていたのか、それとも大学旧校舎が金蔵院跡地に移築されて園舎となったのかについては、現時点では確認がとれませんでした。

古い建物であつたらしく、昭和四十二年(一九六七)六月二十日、それまで大学の弓道場であつた場所に高野山学園の幼稚園として新築され、今日に至っています。

高野山幼稚園は本年で創立七十六年目を迎えます。またその前身である子供会は、児童への宗教教育の絶対必要性を説いて、九十四年前に立ち上がりました。今また再び、宗教的な情操教育が見直されるべき時期にきているのかも知れません。

(M)

時事

【第二回もみじ祭りお茶会の様子】  
 昨年十二月十五、十六日に、迎賓館において第二回もみじ祭りが行われました。高野山大学茶道部により、拝観者に抹茶と和菓子が接待されました。部屋内には、第一回フォトコンテストの入賞作品が展示されました。



お茶の接待風景

高野山久保田写真館よりフィルム寄贈

昭和二十年代の寺院、山内の風景など

高野山関係のフィルムや写真プリントなどが、平成十九年十月二日、久保田写真館より霊宝館に寄贈されました。

フィルムはガラス乾板によるもの

のが千三百五十枚余り、ネガフィルム、プリントなどをも含めると約三千点ほどになります。撮影された年代は昭和二十年代から四十年代が大半で、山内の風景や寺院、

僧侶、文化財の写真が大量にあって、霊宝館では今後、詳細な解析と保存を計画しております。

久保田写真館は大正末期から昭和の初めにかけて保田穂松氏（明治三十五年生）によって開業され、ガラス乾板は穂松氏によって撮影、その後は、耕治氏に引き継がれて営業されておりました。



写真に写っている手前から2件目の店が昔の久保田写真館です。建物の2階は写場となっているようでモダンな造りとなっています。



現在の様子

霊宝館の庭園

# 柊・疼木

元高野山高等学校長 亀岡 弘昭



若木の葉枝

場します。数々の武勇で名高い倭建之命が父君の景行天皇から比羅木の八尋矛を賜るといふくだりです。

記貫之は、土佐の国司の任を終え京都への帰途の五十五日間の日記・土佐日記(平安時代)に都の元日に思いをはせ、しめ縄に、なよし(鱈)の頭、ひひら木が添えられたことを記しています。

現在は、立春前日の節分に、この木の葉枝や鯛の頭、地方によってはダイコン、ニンニク、ラッキョウ、ネギなどを門戸の近くに挿し、「鬼は外・福は内」と豆(魔を滅する)をまき除魔来福を祈り、願っています。

ヒイラギには、これらのことによる来る別称・鬼の目突、鬼の目潰、鬼柴などもあります。



柊の葉枝と鯛の頭

柊・疼木は旧暦・新暦の二月とは関係の深い木のようです。なお、この波形葉の



中年木の葉枝

両側の刺を親指と人さし指の先で軽く押さえて呼吸を吹きかけてまわす子供の遊びがあり、幹材は将棋の駒にも用いられたそうです。

ところで、この木の葉は中年木、老年木となるにしたがつて、縁の波頭や刺が少なくなり、全縁の楕円形葉となります。

波形葉と楕円形葉の両方の葉をつける株もあります。年(歳)を積ねて角や刺がとれ円満に、あなたも見習いなさいと教えてくれているようです。

霊宝館には常緑樹も多種、植えられています。常緑樹の観察には好都合な冬枯れの季節、宝物拝観のおり、高野山散策の途中など、館庭の、これらの木を、ご覧になれば、目の保養、心の癒しになるのでは。

## 利用案内

### 開館時間

5月1日～10月31日

8時30分～17時30分

11月1日～4月30日

8時30分～16時30分

休館日 年末年始のみ

拝観料 大人 600円

高・大学生 350円

小・中学生 250円

専用駐車場あり

## 紫雲放光

松下電器が社名を変更するのだとか。高野山で松下電器といえば、大学の旧松下講堂(現、松下講堂黎明館)を思い浮かべます。でも社名が変わったからといって、以後「パナソニック講堂」と呼ぶわけにはいきません。それはさておき、昭和十三年(一九三八)、松下電器は奥之院参道に松下電器物故者供養塔を建立しています。この時、高野山小学校に対しても、当時の金額で千円をポンと寄附しており、企業による社会奉仕活動の一端が見てとれます。いま我が家の電化製品の七割が偶然にも松下製、否、パナソニック製なのを見て、わずかながらも報恩してる気分が酔っております。(M)